

洪凌著 櫻庭ゆみ子訳

フーガ 黒い太陽

台湾文学セレクション 1

あるむ／2013 年 2 月／364 頁／2300 円



白水紀子

本書は台湾のクイアSF作家洪凌の
四の短編小説を収録した作品集で、目次
は以下のとおりである。

玻璃の子宮の詩
月での舞踏
星光が麗水街を横切る
暗黒の黒水仙
その一 闇夜の変奏曲
その二 獣難
肉体錬金術
その一 記憶は晶片の墓碑
その二 水晶の眼球
罫體の地の十字路
サロメの子守歌
唯一の獣、唯一の主
勇将の初恋と死への希求
白夜の詩篇
その一 寓話創神記
その二 暗黒の黙示録
その三 夜陽の誕生

中国語版『黒太陽賦格』（蓋亞出版、
二〇一三年三月）と同時に刊行され、日

本語訳された洪凌の作品集としては本書が最初である。収録作品のうち、「星光が麗水街を横切る」が『異端吸血鬼列伝』（一九九五年）から、「玻璃の子宮の詩」が『在玻璃懸崖上走索』（一九九七年）から、そして「夜陽の誕生」が書き下ろしであるほかは、『復返於世界的尽头』（二〇〇二年）および『銀河滅』（二〇〇八年）からとられており、黒い太陽というテーマをめぐって多様な物語が展開している。

作者の洪凌の英語名はLucifer。ルシファーとは雌雄同体の墮天使の長、魔界の王サタンのことを指し、悪のイメージが強いが、おそらく洪凌はミルトンの『失樂園』に描かれるルシファー——ヤハウエの偉大さを知りつつ服従よりも戦って敗北することを選んだ墮天使——のイメージからとったのではないかと推察する。

作品の紹介に入る前に、台湾におけるクイアについて少し補足すると、台湾本土の性解放運動の中でクイアという言葉が「酷児」という漢字に訳されて広まる

のは、洪凌、紀大偉、但唐謨が一九九四年一月、雑誌「島嶼邊緣」第一〇期の「酷児 Queer」特集で「酷児」という漢字を使ったのが最初だとされている。彼らが台湾にクイア理論を仲介した意図は

台湾本土のゲイ・レズビアン運動の主流化を防ぎ、セクシュアリティの常識を疑い、突き破ることにあった。つまり、同性愛と異性愛の平等を勝ち取るだけでなく、セクシュアリティの階層化そのものを徹底的に取り除き、セクシュアリティの正常／偏向・変態の区別をなくそうとするもので、その範囲はゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーなど多岐にわたる。洪凌には日本の漫画文化や欧米のSF作品に関する翻訳書や著書があり、それらは彼女の創作にも影響を与え、ジャンルの混合やSFおよびメタ小説の技法を駆使したトランスナショナルな作風が彼女の特色となっている。それゆえ洪凌の小説には具体的な台湾の風景や歴史が語られることは少ないが、クイアの手法を戦略的に使い、性別の多様性・流動性の描写を通して、経

済成長を経て過剰な消費・情報社会に突入した台湾の都市に生きる人々の疎外感や人の主体の不確実性をシャープに描き出しているといえる。

第一話「玻璃の子宮の詩」は洪凌の作品群のなかではめずらしくリアリズム小説風で、すんなり物語の中に入っていける作品である。母と娘の葛藤と和解という古典的なテーマがそれを助長するのだが、読み進んでいくとそこには母娘相姦というクイア的主題が横たわっていることに気づかされる。レズビアンである母親と試験管ベビーである娘の渾然一体となった愛憎が詩的な言葉で語られ、母親の恋人であり娘のもう一人の母親でもある、水凌のガラスの子宮から生まれ出るであろう何物かの存在を暗示して物語はいったん閉じる。そして本書の最後の作品「夜陽の誕生」において、黒い太陽が周縁の地にある黒い深淵（子宮）から誕生し、昼と夜が一つに融合した世界の始まりを告げる物語が語られ、最初の作品「玻璃の子宮の詩」へと循環する。

第二話「月での舞踏」は血なまぐさく

暴力的な殺人劇である。身体を切断され腐臭を放ち始めた男の死体の前にいるのは、女になることを望んでいた男。なぜ彼／彼女は殺人をおかしたのか。男性の身体を有し女性の心を持つトランスジェンダーの「ワタシ」は女を好むレズビアンである。だがSMプレイを堪能するレズビアン女性Sから「ワタシ」の如何ともしがたい男の身体を嫌われ失意のどん底にあるとき、「ワタシ」を愛するゲイ男性Kから「おまえが自分をどう定義しようが……おまえは男だ」と言われ「彼は巧みに「ワタシ」を殺した」（六九頁）と感じる。そして関係を迫ってきたKを刺し殺して性器を切り取り、自らも浴槽で性器を切り落とし、流れ出る血を月経血だと言いながら死んでいく。混濁する意識の中でデヴィッド・ボウイの「レッツ・ダンス」が流れ、女の体に生まれ変わった「ワタシ」は月夜の下でSと全裸になってダンスを踊っていた。セクシユアル・アイデンティティを死をもつて手に入れようとしたトランスジェ

ンダーの話である。

第三話「星光が麗水街を横切る」、第四話「闇夜の変奏曲」および第五話「獣難」はいずれも女吸血鬼の物語で、グロテスクで血なまぐさい話が続く。「星光が麗水街を横切る」は探偵小説風に仕立て上げられており、被害者全員が男性、死体は切り刻まれ、そこに血文字が残されるという猟奇的殺人事件が連続して二件起きる。「非常資料処理局」の局長である非非がその調査に乗り出すのだが、実はこれは女吸血鬼たちが同類を引き寄せるための「エサ」だった。非非は血文字のメッセージを解読していくうちに「犯人」にたどり着き、これまで自ら封印していた吸血鬼の本性を開花させる。次の「闇夜の変奏曲」は舞台が台北から一九九〇年代末の東京に移り、新宿二丁目の街角にあるバー「伊邪那美」（イザナミ）にビロードの黒水仙を持った女ダフオデイルが現れる話。彼女こそ純粋な吸血鬼の末裔でバンパイアのプリンセスであった。その続編の「獣難」は、舞台は同じく東京だが、時代は近未

来の二〇九九年、異界の存在である女吸血鬼と豹女が咬合する魔界世界のファンタジーである。核戦争で被爆した患者たちが次々に「廃棄物処理場」へ送られていく東京。女吸血鬼のダフオデイルは「伊邪那美」で、核戦争の中で生まれた突然変異、分類上は豹に属する畸形変種生物（ミュータント）ジュリアンと出会い恋に落ちる。ダフオデイルは相手の血を、ジュリアンは相手の精髓を必要とし、愛し合うことは互いの死を意味した。愛ゆえに自ら死を覚悟したダフオデイルはジュリアンに精髓を吸わせるが、犠牲の気持ちで捧げた精髓は毒液に変わり、ジュリアンは死んで完全にこの世から消滅してしまう。

ところで、古典的な吸血鬼の物語が生まれた背景には、時代の制約のために同性愛行為を描くことができず、そのために首を噛み血を吸う吸血鬼というモンスターが創造されたといわれている。血を吸り合うことで主体と客体の境界が消え、両者の欲望が一体となったときの恍惚とした表情は明らかに性的エクスタ

シーを表している。注目すべきは吸血というスタイルで、性の快楽を吸血という行為で表現したことは、種族の繁栄のために生殖を至上の目的とする男女の性器の交合に対抗する、新しい性愛の形の提示でもあった。性愛における女同士の組み合わせが最もこの吸血鬼のスタイルに近い。また、古来から鏡には人間の魂を映し出す力があると信じられており、肉体と魂の結びつきが弱いとされる吸血鬼は、鏡にその実像が映らないとされる。

これはまさにセクシュアル・マイノリティが社会で不可視化されている暗喩でもあるだろう。

「獣難」の邦訳はすでに「台湾セクシュアル・マイノリティ文学シリーズ」の第三巻『小説集 新郎新「夫」』（作品社、二〇〇九年）に「受難」として同じく櫻庭ゆみ子訳で収録されている。そこでの訳者の解説によれば、「SFファンタジーを下地に、日本のコミック小説風の戯画、SMの味付けと、ややちぐはぐなごたまぜ感があるものの、存在の消滅をかけたエロチックな結合場面へとクライマッ

クスを収斂させてゆく構造をみれば、バタイユの「エロティシズム論」にジェンダーの概念を持ちこんで戦略的に構築したものであることがわかる。人間存在の根源的な問題であるエロティシズムについての寓話と言ってもよい」とある。

洪凌の作品はデビュー当時、陳雪、紀大偉とともに「新感官小説」と呼ばれたことがあり、特に洪凌は挑発的でエロティックな言語、異類との交わり、SMのサディスティックな描写を得意とする。そのためフェミニストやレズビアングループに不安や不快感を与え、彼女たちから敬遠されることもあるが、しかし洪凌が性のカテゴリーから逸脱するこうした「異端の情欲」の描写に執着するのは性差攪乱を目論んでいるからに他ならず、同性愛だけでなくその他のさまざまな「異端性愛文化」を開拓することで、異性愛中心主義それ自体の再考を迫っているように見える。

洪凌のSF作品は、題材をギリシャ神話やキリスト教の教義に求めた神話的な

世界を背景にしながら、同時に欧米の古典的SF小説やサイバーパンク、日本の漫画・アニメ、ゴシック小説などから、時にパロディとして、時にその作品へのオマージュとして、これらに登場する人物の名前や地名や台詞などを引用、借用、転用して遠未来の世界を描いており、時空次元は自由自在で広大無辺である。そしてさらにセクシュアリティにおいても、すでに見たクイア小説のように、同性愛、トランスジェンダーのほかに雌雄同体の人間や異星の存在物が登場し、不思議な身体感覚を伴う性差越境の異世界が描かれる。こうした洪凌の作品のもつ間テクスト性や構造の重層性ゆえに、本書に収録されている作品のテーマやストーリーの紹介は一筋縄ではいかない。そこでその任は本書の最後に付された訳者の櫻庭氏の詳細な解説に譲り、ここでは評者が関心を寄せるクイア表現の側面から作品を概観したい。

第六話「記憶は晶片の墓碑」は洪凌が台湾SF界にデビューした記念碑的な作品であり、後星曆三三三年と後星曆六六

六年の二つの次元の物語が平行して進む。主人公は始まりと終わりの一対であり、双頭の蛇を連想させる、両性具有のアルファとオメガ。オメガはその脳内に宇宙を支配するオールマイティ社のチップが埋め込まれている。二人はかつて共同でゲームを開発し、ゲームに負けたアルファはロールプレイングゲームさながら、全知全能のオメガの監視のもと、体内に埋め込まれたメモリチップの記憶を何度もしリセットされて生き続けている。

アルファと恋人のベータとの関係は、後星暦三三三年では男性同性愛、後星暦六六六年では女性同性愛で、これもオメガがアルファに男女どちらか一つの性を与えるようプログラム設定した結果だった。アルファの恋人のベータはオールマイティ社製のアンドロイドであり、後星暦三三三年にアルファとともにオールマイティ社に対する爆弾テログループに加わって失敗したとき、また後星暦六六六年にオールマイティ社の核弾頭を満載した人工惑星を発見したときも、ゲーム終了と同時に分解処分されてしまう。これ

ら一切を叙述し監視するオメガは、アルファとベータの生死をかけた激しい情欲を覗き見、ベータの死を悲しむアルファの打ちひしがれた姿を見るにつれ、しだいに嫉妬を覚え疎外感を募らせていく。続編「水晶の眼球」では、覚醒したアルファが自分は一体何者なのか、記憶とは

ペテンであり、本当の操り人形は私たちではないかとオメガに詰め寄り、オールマイティ社のコンピュータ中枢を破壊して自分も破壊しようとする。そこでオメガはこれまでアルファを監視してきた赤い眼球を取り出してアルファに捧げ、自らネット自爆プログラムを作動させる。そして再び深淵から這い出してきたオメガは自分の存在理由を見つけるために新たな物語を紡ぎ始める。

台湾でのSF文学賞は一九八四年、『時報』文学賞に付設された科幻文学賞に始まる。それから一〇年後、『幼獅文藝』創刊四〇周年を記念して一九九四年に設けられた幼獅文藝科幻小説奨において洪凌のこの「記憶は晶片の墓碑」(発

表当初のタイトルは「記憶的故事」、のち改題)は、台湾SF界の重鎮である張系国から「同性愛の描写が露骨すぎる」として選考の対象から外されそうになったものの、議論のすえ見事、優秀賞を受賞した。彼女がこれにより一躍SF文学界にデビューを果たすのだが、この年は台湾SF文学の歴史においても特筆すべき年となった。最優秀賞を受賞した張啓疆「老大姐注視你」、優秀賞の洪凌「記憶的故事」、そして佳作四作のうちの一つ紀大偉「他的眼底、你的掌心、即將綻放一朵紅玫瑰」が、いずれも記憶の書き換えと人体改造を題材にしたサイバーパンクであり、非異性愛の性表現が突出していることで大きな注目を集めたのだ。台湾SF界に「后現代」(ポストモダン)、「后人類」(ポストヒューマン)、そして「酷児」(クイア)という言葉が流入し、熱い議論が戦わされた画期的な年となったのである。

続く第七話「髑髏の地の十字路」は、サタンの引き起こした原罪を贖うため自

らを「贖罪」の贄とするヤハウエの子（すなわちキリスト）が登場する。キリストは自身の半身である六翼の墮天使セラフイムに「愛しいセラフイム」と呼びかけて一体となることを求めるが、セラフイムは「愛、それは最も悲しい別離」と言い残して二人を縛る鎖を解いて彼岸へと去ってゆく。キリストも永遠に続く十字架の刑から解き放たれる。

第八話「サロメの子守歌」は西暦三七二年、この世に生まれ出んとする全能の神、聖魔陰帝（マルゴ）の出生をめぐる物語。急逝した母なる神シュティルナーの愛人であった両性具有の雨夜の胎内にはシュティルナーが自身の子孫を残すために培養した胚核が残っていた。だがこの胚核は陽性因子の刺激で活性化しなければ永遠に凍りついたままである。陰性のエロスに突き動かされた雨夜はシュティルナーの夫である永野樞に襲いかかり、やがてマルゴが誕生する。第九話「唯一の獣、唯一の主」は兄弟の近親相姦ともいえる寓話。神と野獣の複合体である弟の生神獣グリフォン帝が兄の残

陽帝と交わり、内なる深手をいやす最上の聖業として残陽帝の血肉を喰らいつくし、体躯内の兄とともに六道輪廻の旅に飛び立っていく。第一〇話「勇将の初恋と死への希求」は魔王の後継者司徒桶を受した南天超銀河のタダアン將軍（女）が、その願いがかなえられた絶頂に咬み引き裂かれ粉々に解体される話。そして最終章「白夜の詩篇」に収められた「寓話創神記」「暗黒の黙示録」「夜陽の誕生」では諸々の太陽の王である夜陽の目覚めと、夜陽の子ヒュペリオンの誕生が語られる。深い眠りにについている神の核に一千年の物語を語り聞かせていた女の預言者が最後の物語「空無」を語り終えたとき神の子が誕生する。暗闇と光が咬合して光と闇に二極分裂していた世界は消失し、これよりのち昼夜は一つに融合

して頭上に黒い太陽が浮かぶようになる（「寓話創神記」）。「暗黒の黙示録」で魔界の侯爵バールは、一切が最終段階に望んだとき、悪と真実の本来の姿が立ち現れ、新しい物語が「あなた」とともに始まると言う。その「あなた」とは暗黒

の王位継承者である両性具有の夜陽。夜陽が目覚めた瞬間に黙示録の封印が解き放たれる。訳者の櫻庭氏が記しているように、「闇の世界の始まりを告げるこの物語では、創神するのは女性の預言者であり、創られる神も性別のない子猫のような「異界のもの」。父殺しを謀った闇の王は雌雄同体であり、二元論の体系が支配する世界をおわらせ、黒い太陽の世界を始める」。こうして万物が本源へと回帰し、黒い太陽が支配するクイアナ世界が始まるのである。終末の到来とキリストの再臨についての予言を記した異端の書「ヨハネ黙示録」にヒントを得て、それをクイASF仕立てにした洪凌の深い宗教的関心を示す作品となっている。

ポスト近代の時代はインターネットによって社会の可視化が進み、すべてが白日の光にさらされている。むしろそれゆえに人々は居場所をなくし生きる拠り所を求めて浮遊する。洪凌が黒い太陽の世界の到来を希求するのは、そんな「正し

く」「明白な」光の世界に対する強い批判があるからではないだろうか。

九〇年代台湾のポストモダニズムの代表と言われ、また台湾SF界に新風を吹き込み、クイアSFの代表旗手として今も旺盛な創作を続ける洪凌の作品が、今回このようなまとまった形で、また洪凌の独特な文体を日本語で見事にとらえた櫻庭氏の訳文によって、日本の読者に届けられたことを心から喜びたいと思う。

注

- 〈1〉 劉仁鵬「在「經典」與「人類」的旁边——一九九四幼獅科幻文学獎酷兒科幻小說美麗新世界」『罔両問景』中央大学性／別研究室、二〇〇七年、一六四頁。
- 〈2〉 邦訳に白水紀子訳「赤い薔薇が咲くとき」(台湾セクシュアル・マイノリティ文学2『紀大偉作品集 膜』作品社、二〇〇八年)。